

思いや意図をもって歌う力を育てる音楽科授業の在り方

— 言葉や音楽で表現の工夫を伝え合う学習活動を通して —

呉市立安浦中学校 今井 章絵

研究の要約

本研究は、思いや意図をもって歌う力を育てる音楽科授業の在り方について考察したものである。文献研究から、本研究における思いや意図をもって歌う力を「自分の明確な考えや願いをもち、必要な技能を身に付けて、表現の工夫を生かして歌う力」とであると定義した。この力を育てるために、授業モデルを作成し、要素に着目するワークシートを使い、言葉や音楽で表現の工夫を伝え合う学習活動を展開した。また、思いや意図を生かして歌う力の指標を作成し評価した。その結果、要素に基づいた表現の工夫を行いながら、思いや意図をもって歌う力を育てることができた。このことから、言葉や音楽で表現の工夫を伝え合う学習活動は、思いや意図をもって歌う力を育てるために有効であることが分かった。

キーワード：思いや意図 言葉や音楽 授業モデル 歌う力

I 研究主題設定の理由

中学校学習指導要領（平成20年）音楽の第1学年の内容「A表現」（1）歌唱の活動の事項アには、「歌詞の内容や曲想を感じ取り、表現を工夫して歌うこと。」¹⁾と示されており、事項ウには「声部の役割や全体の響きを感じ取り、表現を工夫しながら合わせて歌うこと。」²⁾とある。中学校学習指導要領解説音楽編（平成20年、以下「中学校解説」とする。）に「『表現を工夫して歌う』とは、表現したい思いや意図をもち、要素の働かせ方を試行錯誤し、よりよい表現の方法を見出して歌うことである。」³⁾と示されていることから、生徒が表現したい思いや意図をもって歌う力を育てることが大切であるといえる。

国立教育政策研究所教育課程研究センターにおける「特定の課題に関する調査（中学校音楽）調査結果」（平成22年、以下「特定調査」とする。）で、強弱による表現の工夫を考え、楽譜に記入する内容の通過率は90.6%であったが、工夫したいことを生かして歌っていると認められるものは28.4%であった⁴⁾。このことから、明確な思いや意図をもって表現を工夫して歌っているとはいえない。

所属校においても、楽譜に記された記号に気を付けて歌うものの、漠然と曲想を感じ取るにとどまり、明確な思いや意図をもって表現を工夫して歌うことは十分ではない。それは、音楽を形づくっている要素に着目させたり、要素の働かせ方について考えさ

せたりすることが十分ではないことと、歌う力が表現の工夫を生かしたものになっているか評価することが不十分であったことが原因と考える。

そこで、第1学年の合唱を扱う題材において、音楽を形づくっている要素に着目させることで考えをもたせ、表現の工夫を伝え合う音楽活動を展開することによって、思いや意図を明確にもち、それを表現に生かして歌う力が育てられると考え、本主題を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 思いや意図をもって歌う力とは

(1) 思いや意図をもって歌う過程

小学校学習指導要領解説音楽編（平成20年）には「『思いや意図をもって歌う』とは、表現に対する自分の明確な考えや願い、意図をもって歌うことを意味している。」⁴⁾と示されている。

評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校 音楽）（平成23年、以下「参考資料」とする。）の「音楽表現の創意工夫」の観点の評価規準の設定例には、「音楽を形づくっている要素（音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成など）を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取りながら、歌詞の内容や曲想を感じ取って音楽表現を工夫し、どのように

歌うかについて思いや意図をもっている。」⁵⁾と示されている。このことから、「音楽表現の創意工夫」の観点では思いや意図をもっていることを評価すべきことが分かる。また、伊野義博（平成26年）は、この観点における「思いや意図」の位置付けについて、「知覚・感受」しながら「音楽表現を工夫」し、どのように表すかについて「思いや意図」をもつとなっているが、この3点は順序性をもって学習されたり、ランダムに行き来しつつ音楽的な思考を深めたりするものであることを述べている⁽²⁾。これらのことから、知覚・感受することは音楽活動の支えとなることや、「知覚・感受」と「音楽表現を工夫」を繰り返していくことがより明確な「思いや意図」をもって歌うことに繋がるものであると考えられる。

以上のことを踏まえ、思いや意図をもって歌う過程を図1に示す。

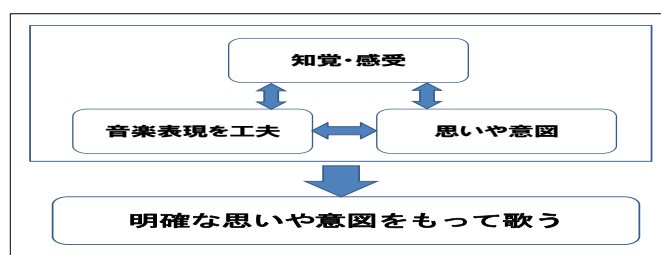


図1 思いや意図をもって歌う過程

(2) 歌う力とは

「中学校解説」では、音楽表現の技能について、「生徒が表現したい思いや意図をもち、それを歌唱で表現できるようにすることが大切である。」⁶⁾と示されている。また、「参考資料」では【「A 表現・歌唱」の評価規準に盛り込むべき事項】として、音楽表現の技能の観点に、「創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けて歌っている。」⁷⁾と示され、必要な技能として発声、言葉の発音、呼吸法、身体の使い方、読譜の仕方などが挙げられている⁽³⁾。これらのことから、表現を工夫することと、それを生かして歌うための技能とが結びついて音楽表現の技能となることが分かる。

「特定調査」の歌唱実技では、自分が考えた表現の工夫を生かし、豊かな表現で歌っているかを把握するための調査が行われており、「音高」「音価」「強弱」「総合的な所見」の四つの観点で採点されている⁽⁴⁾。このことから、音高（音程）や音価（リズム）といった歌うための技能と、強弱などを生かした豊かな表現とを評価していることが分かる。

以上のことから、歌う力を評価する際には、表現

の工夫を生かしていることと、音程やリズムなどの基礎的な技能とを両方で評価すべきであるといえる。

(3) 思いや意図をもって歌う力とは

(1) (2) より、本研究における思いや意図をもって歌う力とは、自分の明確な考えや願いをもち、必要な技能を身に付けて、表現の工夫を生かして歌う力であると定義する。

2 言葉や音楽で表現の工夫を伝え合うことについて

(1) 言葉や音楽

津田正之（平成26年）は、音楽科における育成する「表現力」を「思考・判断した過程や結果を、言語活動等を通じて表す力」「歌ったり、楽器を演奏したり、音楽をつくったりする力」と二つに分けて示している⁽⁵⁾。このことは、音楽を表現するためには、考えたことを言葉で表す力と、言葉だけでなく実際に音楽を通じて表す力が、音楽科で育成する「表現力」であるといえる。大熊信彦（平成20年）は中学校音楽科における言語活動の充実について、音楽のよさや美しさを生み出している様々な要素の働きについて、言葉で説明をすることなど言語活動を取り入れるように指導を工夫することが大切であると述べている。また、音楽に関する用語や記号などを用いた言語活動を積極的・効果的に取り入れることによって、音楽の本質である「音によるコミュニケーション」と質的に結び付いていくようにする必要性について述べている⁽⁶⁾。このことは、音楽科において表現を工夫する際に、要素の働かせ方など、音楽に基づいた言葉で伝え合うことが音楽の質を高めることに繋がるといえる。

以上のことより、本研究での言葉とは、音楽を形づくっている要素に基づく言葉とし、音楽とは、表現の工夫を実際に声に出して歌って奏でる音楽であることとする。

(2) 表現の工夫を伝え合うことについて

「中学校解説」の内容の取扱いと指導上の配慮事項においても「音楽に対する自己のイメージや思いを伝え合ったり、他者の意図に共感したりできるようにするなどコミュニケーションを図る指導を工夫すること。」⁸⁾と示されており、生徒同士のコミュニケーションを重視することが求められている。平成28年8月に発表された「芸術ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」の中では、「『対話的な学び』の実現のためには、一人一人が『音楽的な見方・考え方』を働かせて、音楽表現をしたり音楽

を聴いたりする過程において、互いに気付いたことや感じたことなどについて言葉や音楽で伝え合い、音楽的な特徴について共有したり、感じ取ったことに共感したりすることが重要である。」⁹⁾と示されている。これは音楽表現をする際に、自分の考えや願いを伝え合うことで、一人だけの考えに留まらず、自分が気付かなかったことに気付いたり違う意見に触れ自分の考えが深まったりすることが考えられる。

このことにより、表現の工夫を伝え合うことは、音楽の感じ方や考え方が豊かになり更なる表現の工夫に結び付いていくものといえる。したがって本研究では、表現の工夫を伝え合う学習活動を展開する。

(3) 言葉や音楽で伝え合うバランスについて

言葉と音楽で表現の工夫を伝え合う際には、バランスが必要になってくると考える。伊野（平成26年）は言葉によるコミュニケーションの課題を「言葉の洪水とそれに伴う音楽活動の不在は、音楽の学びを失わせてしまう」¹⁰⁾と挙げている。齊藤忠彦（平成24年）は評価の観点の「音楽表現の創意工夫」を主として取り扱う授業で、思考や判断したことを言葉で伝え合う必要性を述べた上で、「表現領域における観点の『音楽表現の技能』とのバランスが崩れてしまうと、言語活動が妙に目立ってしまうのである。」¹¹⁾とし、音楽による表現活動の場をバランスよく配置することが必要であると述べている。臼井学（平成28年）は音楽の授業において「音楽表現と言語活動の往還」が丁寧に行われることの大切さを述べている⁷⁾。これらのことは、表現の工夫を言葉ばかりで伝え合うことは、本来音を媒体としたコミュニケーションであるべき音楽の本質を見失っているともいえる。

このことより、本研究では言葉で伝え音楽で表現するという繰り返しの活動を取り入れ、言葉と音楽のバランスを図りながら伝え合う学習活動を進めていくこととする。

(4) 学習形態について

本研究では、表現の工夫を伝え合うために学習形態を工夫したいと考える。佐賀県教育センター「個別実践研究」小・中学校音楽科教育研究委員会の「音楽の特徴を捉えて音楽を聴き味わうことができる児童生徒の育成の研究」（平成27年度）の中で、「言語活動の充実を図る学習形態」について示されている。ペアでは「気軽に交流ができる。」「友達考えを基に自分の考えを生み出しやすくなる。」という利点を挙げており、グループでは、「多様な意見を交流することで考えを広めたり深めたりするよう

な場合は6～8人が取り組みやすい。」と示されている⁸⁾。このことから、学習形態の編成を工夫することで、充実した言語活動につながり、生徒の意見を引き出しやすくなるといえる。

また、大垣市立西部中学校（平成26・27年度）の「〈音楽科〉における学びを深める授業づくり」の実践の中でも学習形態を工夫した事例が見られる⁹⁾。この事例は、混声合唱の題材の中で、声部の役割を理解し、厚みのある響きを作り出して表現する力を養うことをねらいとしたものである。パートで音取りをした後、声部の役割を意識させるため各パートを網羅した小グループで集まり、主旋律を意識した歌い方を考えさせていた。学習形態を変えることで、他のパートとの音の重なり方がよく分かり、音楽表現の深まりを感じることができたという成果を挙げている。

これらの事例から、本研究においても、目的に応じて学習形態を変えていくこととする。

3 表現の工夫を伝え合う授業モデルと授業の実際

(1) 表現の工夫を伝え合う授業モデルについて

これまでの考え方を踏まえ、本研究における表現の工夫を伝え合う授業モデルを図2に示す。

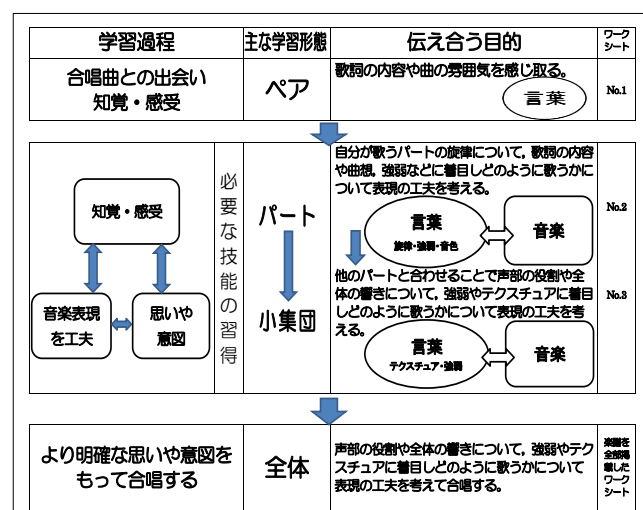


図2 表現の工夫を伝え合う授業モデル

まず、合唱曲との出会いの場では、ペア活動を設定する。自分の意見が言いやすく相手の考えを取り入れやすいと考えられるペア活動で、知覚・感受したことから歌詞の内容や曲の雰囲気を感じ取らせることをねらいとする。表現の工夫を考える場では、パートと小集団のグループ活動を設定する。パートにおいては、主に旋律、強弱、音色などに着目させ

楽曲を時間的な流れの中で捉えさせる中で、要素に基づいた言葉と音楽で繰り返し伝え合う活動を取り入れる。その次に、各パートを網羅した小グループに分かれ、テクスチュアや強弱に着目させ、声部の役割や全体の響きについて音の重なりを意識させて表現の工夫を考えさせる。本研究ではこのグループを小集団とする。それぞれのパートで考えた表現の工夫を小集団において伝え合うことにより、テクスチュアに着目しパートの役割を考えた表現の工夫につながると考える。これらのグループ活動においては、言葉で伝えた表現の工夫を歌って試すように促し、言葉と音楽でバランスよく伝え合えるようにする。また、歌って試す中で、必要な技能の習得を目指す。生徒同士で技能を高め合うことも考えられるが、必要に応じて指導者による一斉指導により技能習得の場面を設定する。

(2) 授業の実際

授業モデルに基づく授業では、要素に基づいた表現の工夫を伝え合わせるためにワークシートを活用する。ワークシートには、個人の思いをまず記入させ、それを基にして他者と伝え合わせる。第1時で使用するワークシートを図3に示す。

歌 詞		No. 1	
1 この曲は卒業式で歌う曲です。曲の印象を書いてみましょう。			
歌詞が表す情景や心情から感じたことや気付いたこと	自分の意見	友だちの意見	
	①	②	
曲の雰囲気から感じたことや気付いたこと			
2 1のように感じたのはなぜでしょうか。音楽的な特徴に着目して考えてみましょう。音楽的な特徴を表した言葉を使って書きましょう。			
音楽的な特徴 音色 旋律 速度 テクスチュア (音の重なり) 強弱 リズム	自分の意見	友だちの意見	
	③		

図3 歌詞の内容や曲想を感じ取るためのワークシート

図3のワークシートでは、ペアで伝え合うことにより、曲への理解を深めることをねらいとする。まずは自分の意見を書き、個人とペアで行き来しながら自分とは違う考えがあることに気付く、共感したり共有したりしながら、歌詞や曲の特徴を捉えさせる。図3の①では個の考えを書き、それを基にペアで交流させ、新たな意見を②に記入させる。③では、音楽を形づくっている要素に着目させ、個の考えを基にペアで伝え合い、他者の意見に気付いたり共感したりすることで、曲を深く捉えられると考える。

図4は男声パートのワークシートの一部である。ここではパートの旋律のみを掲載したワークシート

を用いて、各パートで、旋律の流れを基に強弱や音色などに着目させ表現の工夫を考えさせる。

図5は、全てのパートが共通して用いるワークシートの一部である。これは全パートの楽譜を掲載したものであり、テクスチュアについて着目させ、声部の役割や全体の響きについて表現の工夫を考えやすくするためのものである。図4のワークシートで考えた自分のパートの表現の工夫を、小集団で伝え合うことにより、合わせて歌うための表現の工夫を考えるワークシートにすることをねらいとする。

図4と図5のワークシートには、まず自分の考えを鉛筆で記入し、その考えを言葉で伝え合い、歌って試し、よかった表現について赤ペンで記入する。自分の考えを記入しておくことで、伝える際に要素に着目した言葉で伝えやすくなり、言葉と音楽で伝え合うことがバランスよく展開できると考える。

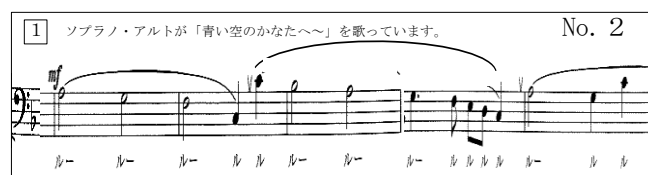


図4 パートで表現の工夫を伝え合うためのワークシート



図5 声部の役割や全体の響きについて表現の工夫を伝え合うワークシート

これらのワークシートを使うことで、要素に基づいた自分の考えを言葉で伝えやすくなり、言葉で伝えることと歌って試すことがバランスよく行われ、伝え合う活動が充実したものになると考える。

Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

言葉や音楽で表現の工夫を伝え合う学習活動を行えば、思いや意図をもって歌う力を育てることができるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表1に示す。

表 1 検証の視点と方法

	検証の視点	検証方法
視点 1	言葉や音楽で表現の工夫を伝え合う学習活動は思いや意図をもつことに有効であったか。	事前事後アンケート 発言内容 ワークシート
視点 2	思いや意図をもって歌う力が育ったか。 ・要素に基づいた自分の明確な考えや願いをもつことができたか。 ・必要な技能を身に付けて、表現の工夫を生かして歌っているか。	ワークシート 演奏聴取

IV 研究授業について

1 研究授業の内容

研究授業の内容	期 間	平成28年12月6日～平成29年1月12日
	対 象	所属校第1学年（2学級60人）
	題材名	パートの役割を考え、曲にふさわしい音楽表現を工夫して合唱しよう
	目 標	・音楽を形づくっている要素に着目し、曲にふさわしい音楽表現を工夫し思いや意図をもって歌うことができる。 ・声部の役割と全体の響きとのかかわりを理解して音楽表現を工夫し思いや意図をもって歌うことができる。
	時	主な学習活動
	指導計画（全5時間）	1 歌詞の内容や曲想を感じ取る。 2 音楽を形づくっている要素に着目し、表現を工夫する。 3 声部の役割と全体の響きとのかかわりを生かして表現を工夫する。 4 声部の役割や全体の響きとのかかわりを理解して曲にふさわしい音楽表現を工夫し合唱する。 5 思いや意図をもって歌唱する。

2 教材について

本研究で扱う教材は、松井孝夫作詞・作曲「はばたこう明日へ」とした。この曲は、卒業を迎えた生徒への温かい励ましの言葉とエールがつまった歌詞で、曲想はしつとりと少し悲しい感じで始まり、後半は速度を上げ、明るく転調する楽曲である。曲の盛り上がる部分である「青い空のかなたへ進め～生きてゆこう」（9小節）は声部の役割や速度を変えながら3回繰り返される。このため、表現の工夫を考えやすい曲であると捉える。

V 研究授業の分析と考察

1 言葉や音楽で表現の工夫を伝え合う学習活動は思いや意図をもつことに有効であったか

(1) ワークシートより

ア 第1時のワークシートより

前述した図3のワークシートを用いた授業後の生徒の記述を図6に示す。この生徒は自分で考える場面で、上段は「明るい」「悲しい」としか記入しておらず、下段は「最後の『青い空へすすめ』の所が強い。」とだけ記入していたが、ペアで伝え合い、自分が気付かなかった視点を聞いた後、友だちの意見の欄に曲想や強弱、速度、テクスチュアについて記入しながら、「ああ、なるほど。」と発し、音楽を形づくっている要素である速度や強弱の変化に気付くことができた。また、伝え合うことで、様々な感じ取り方があることに気付き、音楽を深く感じることもできたことがうかがえる。

1 この曲は卒業式で歌う曲です。曲の印象を書いてみましょう。		
	自分の意見	友だちの意見
歌詞が素直で心から感じたことや気付いたこと	明るい	最初切なくさびしい感じで「青い空」の辺から元気な感じがする。
曲の雰囲気から感じたことや気付いたこと	悲しい	色で例えたら青。背中を押す感じ。
2 1のように感じたのはなぜでしょうか。音楽的な特徴に着目して考えてみましょう。音楽的な特徴を表した言葉を使って書きましょう。		
	自分の意見	友だちの意見
音楽的な特徴 音色 節拍 速度 テクスチュア（音の重なり） 強弱 リズム	最後の「青い空へすすめ」の所が強い。	p→mf→fとだんだん大きく盛り上がっている。速度も「72」「80」「88」と変わっている。「ルールー」とハモル所がmfで、主になるところがfで歌われている。

図6 生徒のワークシート

イ 第2時以降のワークシートと授業の様子より

第2時以降での授業で、パートや小集団において要素に着目した言葉で表現の工夫を伝え、言葉と音楽がバランスよく交わされた例を示す。

パートで表現の工夫を伝え合う授業で、図4のワークシートを用いて表現の工夫を考えた後、図5のワークシートを用い、小集団になる前にパートで声部の役割を考えた場面である。図7はパート練習の際に言葉や音楽で表現の工夫を伝え合う様子を示したものである。

♪歌（2回目のハーモニーをつくる旋律の所） 生徒A「歌ってみて、歌い方で気付きはありますか。」 生徒B「ソプラノが副旋律なので、アルトと男声パートより小さくするけど、聞こえる声で歌うのがいい。〇〇くんが言ったように透きとおる声で。」 生徒C「透きとおるって？」 生徒D「きれいな声」
♪歌（2回目のハーモニーをつくる旋律の所） （歌った後「透きとおる声」になっていてよかったという感じが見られワークシートに記入しているが、音が滑らかになっていない様子を気にしている。） 生徒A「スラーを意識して歌って。」…① 生徒E「音をつなげる？」（数人で歌ってみる。） 生徒A「あつ。そんな感じ。」

図7 パートで伝え合う様子（ソプラノ）

生徒Aは、始めのmfに着目し、「1回目より弱く」歌うという自分の考えをもっていた。パートに分か

れた際、生徒Bのテクスチュアに着目した発言により声部の役割を意識した。また、生徒CやDの発言によって、*mf*の旋律の音色を考えていることがうかがえる。言葉で伝えた表現の工夫を歌って試すことにより、実際にどのような声で歌ったらよいのかを考えることに繋がっている。また、歌って試すことで、新たな課題を見付け、旋律の歌い方について試しながらよりよい表現の方法を模索していることが分かる。

生徒Aは、始めに、強弱には着目していたものの、どのように歌うかまでは記述できていなかった。表現の工夫を言葉で伝え歌って試すことで、どのように歌うかについて具体的な思いや意図となって図8のワークシートのように記入したと考えられる。

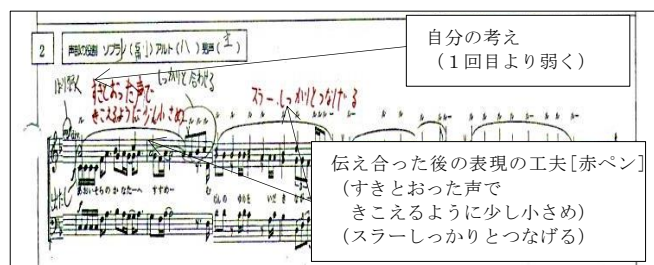


図8 生徒Aのワークシート

小集団では、合唱し聴き合うという授業を展開した。合唱を聞いた後、言葉や音楽で表現の工夫について意見を出し合っている様子を図9に示す。

生徒G「3回目はハーモニー（をつける旋律）だが、ソプラノとアルトが主なので負けないように合わせて大きく。」
 ♪歌（3回目）
 生徒H「ソプラノとアルトが主旋律なので男声パートはもう少し最後を静かにした方がいいと思います。」
 ♪歌（3回目）
 生徒I「ソプラノとアルトが小さいからもっと大きくしてほしい。」
 生徒J「始めからもう少し大きくても」
 ♪歌（3回目）
 生徒K「最後の「ゆこう」までは強さはちょうど良いけど、「ゆこう」だけ、男声パートが大きい。」
 生徒G「音符が（音程が）上がるので、どうしても大きくなる。」
 生徒L「ソプラノとアルトがもう少し大きく歌ったらいい。」

図9 小集団で伝え合う様子

男声パートの生徒Gがこの曲の最後のフレーズを歌う際にテクスチュアと強弱に着目し、どのように歌うかについて表現の工夫を発言し、他のパートと合わせて歌ってみた場面である。合唱を聞いていた生徒Hがバランスについて発言し、それを意識して歌って試している。その合唱を聞いた生徒I、Jが気づきを発言し、その指摘を受けてまた歌ってみる

という繰り返しを行っている。この場面から、言葉で伝え、歌って試しながらよりよい合唱表現を模索していることが分かる。曲の最後の部分で、生徒Kが、ソプラノ、アルトより男声パートの音が強くなっていることを指摘しているが、男声パートの音が高くなっているため、どうしても強くなってしまうことを生徒Gが主張すると、聞いていた生徒Lが「ソプラノ、アルトをもう少し強くすればよい」という発言となった。ここで授業は終わったが、生徒Gのワークシートには図10の※のように、「ソプラノ、アルトをきいて調整する」と書かれていた。このことから、言葉で伝え何度も歌い試してみることによって声部の役割を意識し、全体の響きの中で自分のパートをどのように歌えばよいのかという考えをもつことができている。このことから、言葉と音楽がバランスよく授業で流れ、音楽の質も上がっているといえる。

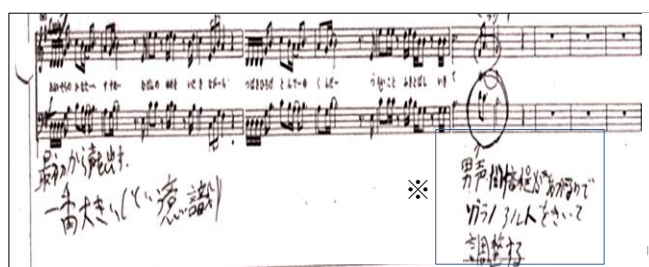


図10 生徒Gのワークシート

以上のことにより、言葉や音楽で表現の工夫について伝え合うことで思いや意図が明確になっていると捉えられる。

(2) 事前・事後アンケートによる分析

事前と事後に行ったアンケートを示す。

	<input checked="" type="checkbox"/> 当てはまる	<input type="checkbox"/> どちらかといえば当てはまる	<input type="checkbox"/> どちらかといえば当てはまらない	<input type="checkbox"/> 当てはまらない
事前	18%	26%	45%	11%
事後	48%	37%	15%	

図11 表現の工夫について友だちと言葉で伝え合うことがあるか

	<input checked="" type="checkbox"/> 当てはまる	<input type="checkbox"/> どちらかといえば当てはまる	<input type="checkbox"/> どちらかといえば当てはまらない	<input type="checkbox"/> 当てはまらない
事前	18%	30%	39%	13%
事後	45%	38%	17%	

図12 表現の工夫について友だちと実際に歌って試すことがあるか

図11から、表現の工夫を友だちと言葉で伝え合っていると肯定的に回答した生徒は事前では44%であったが、事後では85%になり、当てはまらないと

回答とした生徒は0人であった。図12より表現の工夫について友だちと実際に歌って試すことについて、事前では48%であったが、事後では83%となり、当てはまらないと回答した生徒は0人であった。このことより、表現の工夫を言葉や音楽で伝え合う学習活動を生徒が実感をもって行ったといえる。また、図11と図12の事後アンケートの肯定的な回答を見ると、言葉で伝え合うことがあると回答しているものが85%、歌って試すことが83%でほぼ同じ割合になっている。これは、言葉だけで表現の工夫を伝え合ったわけではなく、言葉で伝え合い、歌って試すことがバランスよく行われ、言葉と音楽の往還がなされているものであると考える。

下の図13と図14は、事後アンケートによるものである。図13は言葉や音楽で表現の工夫を伝え合うことは、合唱がよくなると思うかと聞いたもので、図14は、その質問に対して理由を記述させた項目である。肯定的な回答をしている生徒が100%であり、合唱表現を高めていく際には言葉や音楽で伝え合うことが有効であると感じていることが分かる。

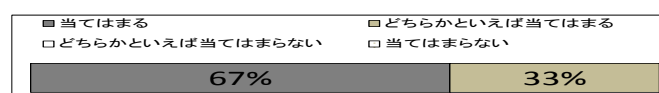


図13 言葉や音楽で表現の工夫を伝え合うことは合唱がよくなると思いますか

- ・他の人の意見も取り入れることができるから。
- ・どうすればいいのかわかり合うことができるから。
- ・パートやグループで言葉や音楽で表現の工夫を伝え合い、あらかじめそのパートの表現を一つにすることで歌声に統一感が出ると思うから。
- ・伝え合うことによって新しい意見が出てきたりするからそれを試してみたらまた新しい意見が出て、どんどん良い合唱になっていくから。
- ・みんなと話し合って実際に歌ってみると、みんなが気を付けて歌うので、よりよくなっているときがあったから。

図14 生徒の記述

この記述より、生徒が他者と感じ取ったことを共有したり共感したりする伝え合いにより、よりよい表現の工夫につながっていると感じており、歌声の質の向上にもつながっていると感じているととらえることができる。

以上（１）（２）より、言葉と音楽で表現の工夫を伝え合う学習活動は思いや意図をもつことに有効であったといえる。

２ 思いや意図をもって歌う力が育ったか

本研究では、Ⅱ 1（３）に定義した歌う力を評価するものとする。そのため、次の２観点で評価する。

まず、音楽表現の創意工夫の観点では、楽譜を全部掲載したワークシートを新たに配布し、思いや意図を記述させる。そのワークシートに記述された内容から、要素に基づいた思いや意図をもっているかという点で評価する。２点目は、音楽表現の技能の観点である。音程やリズムなどが正確に歌われているかということに加えて、ワークシートに記述された思いや意図が、表出されているかという点で評価する。その評価する指標を図15に示す。

なお、歌唱実技テストは、第５時の授業で各パート一人ずつの３人で行う。

音楽表現の創意工夫（ワークシートの記述）	
A 十分満足できる	3回歌われる「青い空のかなたへ進め生きてゆこう」の部分に、音楽を形づくっている要素（強弱、テクスチュア）に基づいた明確な考えをもち、歌詞の内容や曲の雰囲気を理由に挙げたり、3回の歌い方の比較をしたりして、どのように歌いたいのかについて自分の思いや意図を具体的にワークシートに書いている。
B おおむね満足できる	3回歌われる青い空のかなたへ進め生きてゆこう」の部分に、音楽を形づくっている要素（強弱、テクスチュア）に基づいた明確な考えをもち、どのように歌いたいのかについて自分の思いや意図をワークシートに書いている。
C 不十分	3回歌われる青い空のかなたへ進め生きてゆこう」の部分に、音楽を形づくっている要素（強弱、テクスチュア）に基づいた明確な考えをもっていない。
音楽表現の技能（演奏聴取）	
A 十分満足できる	楽譜に示されている音程やリズムがほぼ正確で、発声や言葉の発音、呼吸法などに気を付けてワークシートに記入された思いや意図を十分生かして歌っていることが認められる。
B おおむね満足できる	楽譜に示されている音程やリズムが違箇所もあるが、ほぼ正確で、発声や言葉の発音、呼吸法などに気を付けてワークシートに記入された思いや意図を生かして歌っていると認められる。
C 不十分	楽譜に示された音程やリズムがほとんどの部分で違っており、ワークシートに記入された思いや意図を生かして歌っていない。

図15 思いや意図をもって歌う力の評価の指標

図16は、図15の評価の指標に基づき、ワークシートの記述の評価と、それが歌で表現されているかという音楽表現の技能の評価の結果をクロス集計したものである。

音楽表現の技能		A	B	C	総計
ワークシートの記述	A	15	8	1	24
	B	9	13	8	30
	C	0	3	3	6
	総計	24	24	12	60

図16 ワークシートの記入と音楽表現の技能のクロス集計

（１）要素に基づいた自分の明確な考えや願いをもつことができたか

図16より、ワークシートの記述では、A又はBと評価した生徒は54名であった。このことから、要素に基づいた思いや意図を、9割の生徒が記述していたことが分かる。よって、生徒は要素に基づいた自分の明確な考えや願いをもつことができたといえる。Aと判断した生徒の中には、授業では、ワークシートの記述が未記入だった生徒や、要素に着目するこ

とができなかった生徒がいる。そのうちの一人である生徒Mは、授業では「はずむように」としかワークシートに書いていなかった部分で、実技テストにおけるワークシートでは、2回目に出てくる「生きてゆこう」の終わりの部分に「次につながるように盛り上げて」と記述したり、最後のフレーズの部分には、fに○をし「今までより盛り上げて」「自分が翼を広げ空を飛んでいることをイメージして」と要素に基づいた自分の考えを書き込んだりしていた。これは言葉や音楽で表現の工夫を伝え合うことで、様々な感じ取り方があることに気付く、表現の工夫を考えることで音楽に対する知識を広げ、思いや意図をもつことができるようになったと考えられる。

(2) 必要な技能を身に付けて、表現の工夫を生かして歌っているか

図15の音楽表現の技能の評価で、A又はBと評価した生徒は8割いた。音程やリズムがほぼ正確で、自分の思いや意図を歌で表現していると認められるものである。よって生徒は、必要な技能を身に付けて表現の工夫を生かして歌っているといえる。しかし、2割の生徒がC評価であり、楽譜通りに歌えていない、又は、思いや意図を生かして歌っていないことが分かった。そのうちの7人は、音程やリズムが正確に歌えていない生徒であった。このことは、題材の中で、技能習得の場面を十分に設定できていなかったことに課題があると考えられる。

(3) 表現の工夫と音楽表現の技能の関連

図16から、ワークシートの記入も音楽表現の技能もB以上と評価した生徒は75%いたことから、多くの生徒が思いや意図をもって歌う力が育ったといえる。よって、音楽を形づくっている要素に着目し表現の工夫を考えると、自分の考えた表現の工夫を生かし、必要な技能を身に付けて歌で表現することについては関連があると捉えることができる。

しかし、15%の生徒は思いや意図があってもそれを歌で表現できていないことが分かった。その中でも、思いや意図はA評価だが、技能がC評価である生徒が1人いた。この生徒は思いや意図が心にとどまり、歌で表現することができていない。このことを改善するためには、指導過程の中で、生徒の実態把握を十分に行い、個に応じた技能の習得の指導を位置付ける必要があったと考える。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

言葉や音楽で表現の工夫を伝え合う学習活動は思いや意図をもって歌う力を育てることに有効であることが分かった。

2 研究の課題

思いや意図をもてなかった生徒に対して、音楽を形づくっている要素について知覚・感受するための発問の工夫や、言葉で適切に表すための手立てが必要であると考えられる。また、表現の工夫を歌で表すために生徒が必要感をもって技能を習得することができるよう指導の展開の工夫をすることが大切であると考えられる。さらに、思いや意図をもって歌う力の評価の妥当性を高めることや、評価の指標を生徒と共有していくことについて、今後も研究を進めていく。

【注】

- (1) 国立教育政策研究所教育課程研究センター（平成22年）：『特定の課題に関する調査（音楽）調査結果（小学校・中学校）』pp. 174-181に詳しい。
- (2) 伊野義博（平成26年）：『中等教育資料平成26年7月号』学事出版p. 25に詳しい。
- (3) 国立教育政策研究所教育課程研究センター（平成23年）：『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【中学校音楽】』p. 22に詳しい。
- (4) 国立教育政策研究所教育課程研究センター（平成22年）：前掲書p. 175に詳しい。
- (5) 津田正之（平成26年）：『初等教育資料平成26年6月号』東洋館出版社p. 24に詳しい。
- (6) 大熊信彦（平成20年）：『中等教育資料平成20年9月号』ぎょうせいpp. 80-81に詳しい。
- (7) 臼井学（平成28年）：『中等教育資料平成28年11月号』学事出版p. 65に詳しい。
- (8) 佐賀県教育センターホームページ（平成27年度）：『言語活動の充実を図る学習形態』に詳しい。
http://www.saga-ed.jp/kenkyu/kenkyu_chousa/h27/05_ongaku/
- (9) 岐阜県大垣市立西部中学校ホームページ（平成26・27年）：『校内研究』に詳しい。
<http://www.ogaki-city.ed.jp/seibu/index.html>

【引用文献】

- 1) 文部科学省（平成20年a）：『中学校学習指導要領』文部科学省p. 74
- 2) 文部科学省（平成20年a）：前掲書p. 74
- 3) 文部科学省（平成20年b）：『中学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社p. 25
- 4) 文部科学省（平成20年）：『小学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社p. 54
- 5) 国立教育政策研究所教育課程研究センター（平成23年）：『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【中学校音楽】』p. 22
- 6) 文部科学省（平成20年b）：前掲書p. 26
- 7) 国立教育政策研究所教育課程研究センター（平成23年）：前掲書p. 22
- 8) 文部科学省（平成20年b）：前掲書p. 65
- 9) 中央教育審議会（平成28年）：「初等中等教分科会」教育課程部会 芸術ワーキンググループにおける審議の取りまとめp. 21
- 10) 伊野義博（平成26年）：『中等教育資料平成26年7月号』学事出版p. 26
- 11) 齊藤忠彦（平成24年）：『中等教育資料平成24年7月号』学事出版p. 28